赤鹽、一名紅鹽、一名桃花鹽、形礬石ノゴトクニシテ微紅色ナリ、以上二種紅毛人持來ル、光明鹽、和名ハルシヤシホ、本唐本草ニ出タリ、是卽食鹽中ノ一種、顆塊明徹ナルモノ而已、猶礬石中之明礬、東壁山產水產ノ二種ヲ分別ス、其說精ニ似テ却テ煩雜ナリ、蠻產上品、大塊ニシテ形方解石ノゴトク、色白シテ光徹ナルコト、水精ノゴトシ、壬午客品中長崎紅毛通事吉雄幸左衞門具之、

〔延喜式三十二大膳〕釋奠祭料

石。鹽。十顆、〇略中　鹽一升五合、

〔倭訓栞前編十一志〕しほ〇略中　奥州伊北郡月輪庄に、大鹽といふ里ありて、そこに鹽井あり、此井を汲て鹽を燒り、業とする民家多し、海へは四方ともに四日路なりといへり、西行法師の歌、

あまもなく浦ならずして陸奥の山かつのくむ大鹽の里、古今集に、しほの山さしでの磯とよめるも甲斐の國也、甲斐には海なし、されど其山に溝ありて、鹽出といへり、伊勢飯高郡丹生に、近年川に潮汐ありてしほ水となれり、其山をしほ田山、其谷をしほた谷といふも、よしありしなるべし、凡そ海へ至て近き所五里餘なり、弘法大師の歌とか、

細くびの南の浦にさすしほは丹生の內外のみそぎなりけり、茅原村近し、そこに細くびといふ所ありとぞ、大和吉野郡大名持神社妹山にあり、川原屋村に屬す、社前に潮生淵あり、歲ごとに六月晦日潮水湧出すといふ、又下野國鹽谷郡鹽湯の產、遠州掛川の近邊にも出といふ、河內國錦部郡橫山鹽穴寺の鹽石皆石鹽也、はなしほと稱するは印鹽也、近來佐渡より戎鹽を出す、靑色也、鹽燒は男の業、鹽汲は女の業たる、西土の風も同じ、〇略下

〔甲斐國志百二十三附錄〕鹽〇略中　奈良田村鹽井、本村ハ白峯ノ麓最幽僻ナル孤村ニテ、租稅免許ノ地ナリ、其西ハ大山重絕人蹤タレドモ、信州伊奈郡ノ地ヘ續タレバ、古ハ共ニ大草鄕ト稱シタリキ、